



待降節第3主日 (ヨハネ 1:6-8,19-28)

私たちも証しをするために来た

「彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。」(1・7) 洗礼者ヨハネの使命をひとことと言ひ表しています。私たちの生活が、「証しをするため」の生活となるよう、今週も洗礼者ヨハネに学ぶことにしましょう。

中田神父がお世話になる教会の中で、徹頭徹尾、信仰に生きている人たちと出会うことがあります。今はもう天国にいますが、どこに行ってもどんな場所でも、何かを感謝するのに「マリア様感謝します！」と大声で叫ぶおじさんがいました。三度の食事よりお酒が好きな人で、病院に入院したそのおじさんを教会仲間が見舞った時、頼まれて仲間達がお酒を病院に持ち込みました。

そのおじさんが「持って来たや？」と言うと「持って来たぞ」と答えて、何と「マリア様感謝します！」と言って飲んだそうです。結局そのおじさんは戻ってくることはありませんでした。私は「『マリア様感謝します！』のおじさん」として告別のミサをしたのでした。

もう一人紹介しますと、恐れ多いのですが、すでに天国におられるとある神父様です。この方は「ビールは途中で注ぐな。飲みあげてから注げ」そんな方でしたが、よく「乾杯」と言わずに「主の平和」と言っていました。泣く子も黙る神父様でしたので、非常に印象に残っております。

こうした方々を思い出すたび、その人生は徹頭徹尾、キリスト教の信仰に支えられていたと感じます。社会的な貢献もいろいろあったことでしょう。けれども思い出すのは、それら社会的なことではなくて、いつも信仰にまつわる思い出なのです。

ここまで来ると、その人がどんな人だったかひとことと言ひ表せば、「信仰の人」ということになるでしょう。本人が生きている間は本人が、亡くなればこの人を思い出す人たちが「信仰の人だった」と証しをするわけです。

「彼は証しをするために来た。」ある人がこの世に生まれてきて、イエス・キリストを証しするために生きた。家庭や社会に貢献したことを証しするのではなく(もちろんそれも大切ですが)、あのキリスト信者もこのキリスト信者も、一人の人イエス・キリストを証しするために生きた。もしそうであるなら、イエス・キリストについての彼らの証しはどれほど確実でしょうか。

新型コロナウイルスの影響で、ふだんの教会活動はこの一年ほとんど実施できませんでした。しかし、だからと言って教会の歩みを止めてはいけません。イエス・キリストに託された「福音を宣べ伝えよ」という使命は、諦めてはならないのです。集まって何かを証しすることはできませんでしたが、その代わりに、一人ひとり何ができるかを考える機

会となりました。

聖母月、集まっのロザリオは断念しました。代わりに、心を一つにするため、「夜7時」を目安に家庭でロザリオをしましょうと呼びかけました。それぞれの家庭が、各人が、証しをする場を与えられました。

他にも、教皇様をお迎えするために、家庭での祈りが呼びかけられました。小さな折り鶴を、祈りのしるしにしました。これも、集まって、大勢で証しするのではなく、小さな証しの力をお願いしたのでした。私たち一人ひとりには小さな者でも、「彼は証しをするために来た」その生き方はどんな環境にあってもできるのだと、今年学んだと思います。

実は今、教会に集まっているのも、これから家庭や社会に戻って、証しをする力を蓄えるために集まっているわけです。教会に来て、嘆きを訴え、自分が困っていることをすべて打ち明けるために来ている人もいるかも知れません。

それでも大丈夫です。あなたも、「証しをするために来た」のです。「嘆きを訴えるのはイエス・キリストしかいない」「悩みを打ち明けるのはイエス・キリストしかいない」その証しをするために来たと言えるでしょう。私たちは皆、「証しをするために来た」神の民なのです。私たちの証しは、まもなく来られる救い主によって、報われるのです。

待降節第4主日(ルカ 1:26-38)